

日本労働年鑑 第59集 1989年版
The Labour Year Book of Japan 1989

第一部 労働経済と労働者生活

I 労働経済の動向

概観

☆ 実質経済成長率は、八六年に落ち込んだものの、八七年には四・五％に回復し、八八年に入ってから設備投資の拡大や、堅調な個人消費などの内需拡大によって五・七％となり、六〇年代の「いざなぎ景気」以来の好景気となった。

☆ 有効求人倍率は毎月上昇し、六月には七四年以来はじめて一倍をこえ、求人超過基調で推移し、八八年平均で一・〇一倍となった。完全失業者も、八八年には減少に転じ、前年より一八万人減の一五五万人となり、失業率二・五％と低下した。

☆ 八八年の労働力人口は六一六六万人で前年より八二万人増加し、増加率一・三％であった。就業人口は、前年比一〇〇万人増の六〇一一人で、一・七％の大幅増加となった。就業人口を、自営業主、家族従業者、雇用者という従業上の地位別にみると、前二者が減少したのにたいし、雇用者は一一〇万人の大幅増となった。

☆ 八八年の名目賃金の水準は、調査産業計で月平均三四万一一六〇円で、対前年上昇率は三・八％であった。実質賃金は八五年を一〇〇とした賃金指数によってみると、調査産業計で一〇七・九、対前年比三・三％の増加となった。

☆ 八八年の月平均総実労働時間は、調査産業計で一七五・九時間であった。所定労働時間は一六〇・二時間で、前年より〇・九時間の減にたいし、逆に所定外時間が一五・七時間とその分ふえたため、総実労働時間は前年と同じ水準となった。製造業では、総実労働時間は前年より二時間の増加であった。

日本労働年鑑 第59集

発行 1989年6月26日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始